

楽園の終焉

—*Sir Harry Hotspur of Humblethwaite* における家・階級・ジェンダー—

The End of Paradise: Family, Class, and Gender
in *Sir Harry Hotspur of Humblethwaite*

香山 はるの

Haruno KAYAMA

『ハンプルスウェイトのハリー・ホットパー卿』(*Sir Harry Hotspur of Humblethwaite*, 1870 年) は、アンソニー・トロロープの 26 作目に当たる小説である。準男爵のホットパー卿が最愛の娘エミリーを財産目当ての恋人から引き離そうとした結果、娘はその苦悩から立ち直ることができず、心身ともに弱り果ててこの世を去るという話で、「トロロープの最も悲しい物語」(John Hall, 359)とも言われている。この短編には、崩れゆく地主階級の世界に対するトロロープのノスタルジアとともに、家名に固執する支配階級の価値観に対する彼の疑念や批判も認められ、興味深い。これは、トロロープの初期の代表作、『バーセットシャー年代記』に描かれた、地主が小作人と良好な関係を結び安定した共同体を築いている世界とは大きく異なるものである。トロロープは常に階級制度を無批判に受け入れてきたわけではない。たとえばバーセットシャー・シリーズに登場する貴族、デ・コーシー家の尊大さはしばしば風刺されている。しかし、その一方で、ウィニフレッド・ソーンやその妹モニカに認められるように、多くの支配階級はコミュニティーの中で尊敬と信頼を得ており、少なくともトロロープの 60 年代前半までの小説では、実質彼らの地位が脅かされることはなかったのである。たとえば、『ソーン医師』(*Doctor Thorne*, 1858 年)の第 1 章で語り手は次のように書いている。

「商業の」という形容辞が使われているような意味では、イギリスはまだ商業の国ではない。近いうちにそうならないことを願おう。封建的な国だとか騎士道の国だとか呼ばれる方がきっとまだいい。もし、文明化された西ヨーロッパに上流紳士の住む国があり、統治に最もふさわしいと信頼される真の貴族が土地の所有者になっている国があるとすれば、それはイギリスだ。ヨーロッパの各大国から 10 人の指導者を選んでみるとよい。フランスやオーストリア、サルディニア、プロシア、ロシア、スウェーデン、デンマーク、スペイン(?) から選んで、それからイギリスで最も名の知れた一流の政治家 10 人を選んでみ

よう。その結果どの国に、昔の封建制度的な利害、今で言えばいわゆる土地所有者の利害に対する最も深い愛着、最も誠実な信頼がまだ残っているかわかるだろう。(12)

しかし、1868年から69年にかけて書かれた『ハンブルスウェイトのハリー・ホッツパー卿』においては、このような土地所有に基づく安定した階級社会は力を失いつつあることが示唆されている。以下、この短編の主なキャラクターを分析しながら、この物語に描かれた悲劇、トロロープ自身の言葉を借りれば「ある痛ましい出来事」(*Autobiography*, 335)の背景にあるものは何か、1860年代の後半からイギリス社会に起こった様々な変化も視野に入れて論じていきたい。

ホッツパー家の不幸は、跡取りの一人息子がちょうど成年に達しようとする頃に急逝してしまったことに始まる。一家はカンパーランドで4世紀の間先祖代々受け継がれてきた広大な屋敷に住み、ダラムにも150年以上も継承されてきた地所を持っている。こうした土地からの収入は年20,000ポンドであるという。最愛の息子の死は、ホッツパー卿に耐えがたい悲しみとともに相続問題についての大きな悩みをもたらした。第一に、現在のホッツパー卿の「準男爵」の爵位は彼の死後、親類の青年、ジョージ・ホッツパーに継承されることになるが、この若者の素行については甚だ芳しからぬ評判がある。また、家屋敷については、ホッツパー卿は遺言により一人娘のエミリーに全てを残すことに決めたが、これによって「爵位」と「土地」は事実上別々に継承されることになってしまう。⁽¹⁾ これは歴史ある家系を誇りとしてきたホッツパー卿にとっては大変遺憾なことであった。最も容易な解決策は家を継ぐジョージと土地を相続するエミリーが結婚することである。実際、多くの借金を抱えた放蕩者のジョージは財産を目当てにエミリーに言い寄り、結婚の約束まで交わしてしまう。しかし、ホッツパー卿は娘が素行不良の青年と結婚することを黙って許可する気にはなれない。

物語の初めから、ホッツパー卿は高潔、勤勉、寛容、忍耐、自己抑制、責任感など多くの徳を備えた、模範的なイギリスの地主として描かれる。たとえば、彼は自分の贅沢のためには散財せず、小作人たちのために気前よく金を使うが、それは「彼らの幸福のために、自分は世の様々な恵みを与えられているのだ」(2)と認識していたからである。そしてホッツパー卿によれば、そうした支配階級の自覚こそがイギリスを「最も誇り高く、最も偉大で公正な国」(5)にしてきたのだという。

このようなホッツパー卿にとって、酒とギャンブルを好み自分でも把握できないほど多くの借金を抱えたジョージは、娘婿の候補としては問題外であったが、一方では「爵位」と「土地」を分離することなく次の世代に継承させるという考えも捨てきれなかった。また、ジョージも所詮生まれは「紳士」なのだから良い資質もある筈で、更生が可能かもしれないといった身びいきによる期待も時に頭をかすめた。さらに、娘エミリーがジョージとの結婚を固く決意していることもホッツパー卿の迷いを増幅させることになった。トロロープは後に『ハンブルスウェイトのハリー・ホッツパー卿』は、『ニーナ・バラツカ』(*Nina Balatka*, 1866年)や『リンダ・トレッセル』(*Linda Tressel*, 1868年)の場合と同様、キャラクターよりもむしろプロットを重視して書いた作品であると述べているが

(*Autobiography*, 335)、ホッツパー卿の迷い―「家長」としての義務と、娘に対する「父親」としての愛情の間で揺れ動く心―は、自由間接話法によって鮮やかに描写され、この短編の大きな魅力となっている。例えば、19章における次の文章を見てみよう。

彼はまだそのような婚約はあり得ないと思っていた。しかし、彼はためらっていた一心の底では実はためらっていたのだ。彼はまだ、できれば財産を半分犠牲にしてもジョージを買収したい気持ちでいた。しかし、ためらいもあった。結局のところ、そうして家名と土地が結びつくことには少し慰めもあるではないか。(191-92)

この一節から読者は、実際ホッツパー卿は言葉とは裏腹に（「私の望みはエミリーを―悪党―から守ってやることなのだ」[192]）、この「慰め」にすがり付きたい気持ちになっていることを知る。それは一見娘に折れるということであるが、ある意味では、娘の幸福よりも家の継承を優先させる姿勢とも解釈できるのである。

エミリーは平和で美しいカンバーランドの屋敷で、両親に愛され、いわば純粋培養された20歳の純粋な美しい少女である。彼女はハンブルスウェイトの将来の家長となるジョージに恋をし、彼を理想化してまるで「神」のように崇める。彼女は頑ななまでに一途で、ジョージの多額の借金のことを耳にしても、競馬とは縁を切るという彼の言葉が偽りだったと知っても、彼を墮落から救い出すことが自分の義務だと信じて疑わない。その根底には「私の愛は人に与えるもの。でも一度誰かに与えたら、取り返すことはできない」(79)という強い思いがある。語り手はエミリーのジョージへの盲目的な愛を時に皮肉りながらも、概して彼女の報われぬ純真な思いに同情を示しているように思える。「人は愛する人が不運な目にあつたからと言って見捨てたりはしない！―こう彼女は自分に言い聞かせた。わかっていると自分では思っていた―でも、可哀そうな子よ、全く何もわかっていなかったのだ！」(139)

エミリーは、「恋愛は実らなくても人生にただ一度だけのもの」という考えにおいて、『アリンTONの小さな家』(*The Small House at Allington*, 1864年)のリリー・デイル(Lily Dale)に似ていると言えるかもしれない。リリーは出世欲のために自分を捨てた「価値のない」恋人のことを忘れることができずに独身を決め込み、周囲の者を悲しませる。これは『ハンブルスウェイトのハリ―ホッツパー卿』におけるエミリーをめぐる状況と重なるものがある。しかし、エミリーがリリーと大きく異なるのは、彼女が「家」という重荷を背負わされていることである。

批評家のアーサー・ポラード(Arthur Pollard)は、エミリーの見当違いの頑なな態度が、ホッツパー一家に悲劇をもたらしたと見ているが(152)、むしろ私はアンカ・ヴラソポロス(Anca Vlasopolos)が示唆するように、彼女は上流階級の家名に対するプライドや執着心の「犠牲」であったと考えている(233)。そもそもエミリーがジョージに恋したのは、父親から教え込まれた価値観―すなわち、ホ

ッツパー家の「家長」に対する絶対的な敬意があったからである。また、実は、自堕落な「恥ずべき」ジョージを家に招き、純真なエミリーに引き合わせたのはホッパー卿であったという点も看過できない。たとえば16章では、父親にジョージとの結婚を反対されるエミリーの苦悩が彼女自身の視点から語られる。「なぜ、自分は、女性で相続人だからといって自身の幸せをつかむことが許されないのだろう?...それに、もしジョージの生活や行いが言われているように本当にそんなに悪いものだったとしたら—なぜそんな人が自分の近くに来るのを父は許したのか? 彼は若くて、頭が良くてハンサムで、あらゆる点で魅力的だというだけではなく...ホッツパー家の人間であり、いつかはその家長になる人なのだ」(163)。

また、物語の前半で、ホッツパー卿がエミリーと結婚して代々続く家屋敷を守ってくれる「花婿探し」に奔走しているのも興味深い。たとえば、エミリーは貴族の次男のアルフレッド卿との縁談を強く勧められるが、彼女がこれを拒むや否や今度は高価な衣装を次々と纏わされて、ロンドンの「(結婚)市場に引っ張り出された」(34)。こうした角度から見ると、エミリーはホッツパー家の悲劇の原因というよりも、むしろ女性であるが故に主役にはなれない家の相続問題に巻き込まれた被害者であるとさえ言えるのではないか。そして、エミリーに関して最も憐れむべきことは、ジョージが彼女を愛していなかったこと、即ち、彼もまたエミリーとの結婚問題を「ビジネス」(79)としてしか捉えていなかったことである。

ジョージ・ホッツパーは、ハンサムでスマートな一見人好きのする青年であるが、酒と賭博に耽り、働かずに贅沢な生活をして、拵えた借金を踏み倒すことには何の躊躇も感じない、いわゆる「悪者」のキャラクターである。小説中、エミリーの清らかさが「雪のように白い」としばしば形容されるのに対し、ジョージは「黒い羊」(“black sheep”)、或いは「黒人」(“blackamoor”)というように、一貫してその「黒さ」が強調される。ホッツパー卿が彼を許すことができなかった最大の理由は、ジョージが愛人を持ち彼女から金銭的な援助を受けて暮らしていること、また、自分より身分の低い者をトランプで騙して金を巻き上げたという事実であった。トロロープはジョージというキャラクターを通して「イギリス紳士」とは何かという問いをあらためて投げかけているようにも見える。実際語り手は「生まれも育ちもいい」(118)ジョージについて、絶えずアイロニカルなコメントを加えている。

この物語には、トロロープの他の多くの小説と同様に、キャラクターが書く「手紙」が度々登場する。ここでは特にジョージが書く手紙が多い点に注目したい。1868年秋まで33年間郵便局に勤めたトロロープは、手紙が配達される状況に留まらず、手紙のやり取りが人間関係に与える影響に大きな関心を持っていたようである。とりわけ興味深いのはトロロープがしばしばキャラクターの欠点や邪な考えを、その人物が書く手紙によって暴く方法である。これは、彼が尊敬する先輩作家、ジェイン・オースティンの影響かもしれない。⁽²⁾ たとえば、『高慢と偏見』(*Pride and Prejudice*, 1813年)の13章におけるコリンズ牧師の手紙は、それまで面識のないベネット氏に対して無遠慮にロングボーンの家を話題にするなど、彼の尊大で無神経な性格をコミカルに表している。同じく、『ハンブル

スウェイトのハリ・ホッツパー卿』の10章では、ジョージがレディー・アルトリンガムに宛てた手紙が挿入されているが、一見さり気なく書かれたその手紙の「追伸」には、あわよくばこの「親切的な友人」から金を融通してもらおうという書き手の抜け目ない目論見が露呈し、読者の冷笑を招く。加えて、ジョージに関して際立っているのは、彼が重要な手紙の「下書き」を人に書いてもらっていることである。たとえば、18章でジョージがエミリーに出す手紙は、文末の愛情深い表現に至るまで、レディー・アルトリンガムが送ってくれた「下書き」を「全く言葉通りに」(182)ジョージが写したものである。さらに、物語の終盤で、ホッツパー卿に負債を肩代わりしてもらおうという条件で、エミリーとの婚約を破棄することに同意したジョージは、その旨を伝えるいわば「誓約書」代わりの手紙を一家の弁護士に送るが、それも彼の愛人、ルーシー・モートンが考案した文案の写しに過ぎない。実際それは極めて事務的な手紙で、エミリーに対する愛など一言も書かれていない。文末も「エミリーが彼女にふさわしい立派な縁組みをして、幸せになることを心から祈ります」(226)という他人行儀な言葉で括られている。エミリーがこの手紙を見たらどれほど傷つくか、ジョージには想像できない、否、彼女の気持ちなど彼はそもそも関心がないのである。このように、トロロープは「ゴーストライター」によるジョージの手紙を駆使して、彼の不誠実、無責任、感受性の欠如を読者に強く印象づけている。

ここで、ジョージの愛人兼ゴーストライターであるルーシーについて考えてみたい。ルーシー・モートン、或いはモートン夫人と呼ばれるこの女性は、実際は物語の幾つかの章に登場するのみであるが、大変興味深いキャラクターである。彼女はジョージより3歳年下の人気女優である。今は亡き前夫から虐待され、捨てられた過去を持つが、舞台に立ち自活してきた。「賢い女性」(108)でジョージの無責任な性格も十分承知しているが、彼を愛して別れられない。トロロープの語り手は「あらゆる点で彼女に劣る」(108)ジョージに尽くすルーシーに同情を示すとともに、この自立した女性に敬意を示しているように思われる(Morse, 86)。「ジョージはどうしようもない男で...怠け者で、わがままで、嘘つきで節操がない。ルーシーの方は、非常に天分に恵まれ、多くの美点があり、自己を犠牲にすることもできるし、勤勉で、愛情深く、常に正直ではないにしても、真実を愛せる」(224)。ここでは少々皮肉なユーモアも認められるが、全般として語り手はルーシーに好意的である。

また、22章で頭痛を口実に手紙を書くのを渋るジョージをルーシーが叱りつける場面も印象的である。「あたしには、頭が割れんばかりに痛いのに...何時間も舞台に立たなきゃならなかったことなんかなくて、あんたは思っているの？」(224)。こう問いただすルーシーの苦勞とプロ意識には一種の威厳すら認められる。この意味で、トロロープはルーシーのキャラクターを通して、ジョージに代表される上流階級の「働かない怠惰な紳士」を批判しているように思われる。実際、ルーシーは「楽園」に住む「上等」な人たちについて、痛烈な皮肉を込めて言い放つ。

「もちろんあたしにはわからないわ。あたしのような者は地面からそんなに高いところまで

引っ張り上げられないんだから。立派なご家族は自分たちだけの天国のようなものを作っているらっしゃるけれど、あたしのように貧しくて、たちの悪い、哀れな下等の者にはそれを理解しようなんて無理なのよ。でもね、まあ、どんなに沢山の卑しい土からそのエデンの園は作られていることやら！」(111)

さらに15章で、ルーシーはホッツパー卿と初めて会った時、この「立派な老紳士」(152)が彼女に何か「言うべきでない」ことを言ったので、彼に謝ってもらったと言う場面がある(119, 152)。ホッツパー卿の言った言葉は明らかにされていないが、彼が階級意識や「女優」という職業に対する偏見から、思わず辛辣な言葉を口にしてしまったとしても不思議ではなからう。このような視点から見ると、デボラ・ディーネンホルツ・モース(Deborah Denenholz Morse)が指摘するように、ルーシーがエミリーというライバルを退けてジョージと結婚し、「レディー・ホッツパー」となることは、彼女を対等とは見なさなかった上流階級に対する勝利、或いは復讐であると解釈できるかもしれない(88)。

モースが、ホッツパー家をめぐる痛ましい物語の背後に、1860年代後半から70年代のイギリスにおける社会構造に関わる変化を見ているのは興味深い(80)。たとえば、1867年の選挙法改正では、経済的に自立した「リスペクタブル」な都市労働者が選挙権を得、有権者が100万人以上増加した。また、1870年には「初等教育法」の成立により、初等教育が義務化され、労働者階級にも基礎教育の機会が保証されるようになった。このようにイギリスの伝統的な社会構造が変化していく中で、トロロープは「古き良きイギリス」を体現するホッツパー卿に敬意を示しつつも、彼が信奉する価値観が硬直した、時代にそぐわないものになってきたことを意識していたのではないか。たとえばホッツパー卿はジョージと関わった末、「生まれの良さが人格の良さを決めるものではない」ということをあらためて思い知らされた。また、既に示唆した通り、家に対する彼の「家父長的」な願望のいわば犠牲になったのが、エミリーであった(Vlasopolos, 233)。実際、小説の後半でホッツパー卿自身苦しい思いで自問する。「これまで生涯にわたって、自分は家や家名に重きを置きすぎたのではないか？」(228)そして、これはトロロープ自身の疑問と言ってもよいかもしれない。ホッツパー家をめぐる物語の結末には明るい未来は見えない。傷心のエミリーは、ヨーロッパを旅行中にジョージとルーシーの結婚について知る。彼女が最終的に、強い誇りと愛着を抱いていたハンブルスウェイトに戻ることを拒み、遠く離れたスイスの地で静かに死を迎えたことは意義深い(Morse, 82)。一家の家屋敷はハンブルスウェイト卿の妻の甥が相続することになるが、資産家のこの青年にとってはとりわけ誇りや価値を感じるものではないという。こうして、「ホッツパー家の栄光は幕を閉じた」(246)のである。

しかし、一方で、「樂園」が失われた後にたくましく生きていくキャラクターがいることを最後に述べておきたい。それは、ジョージと結婚して新たに「レディー・ホッツパー」の座に就いたルーシーである。この短編が執筆された60年代末から70年代にかけて女性を取り巻く環境に関しても、大

きな変化が起きていたことは注目に値する。たとえば、1866年にはJ.S. ミルが婦人参政権法案を議会に提出したことはよく知られている。この法案は否決されたが、これを機に「全国女性参政権協会」がロンドンに設立され、また、全国の主要な都市にもそれぞれ独立した協会ができて、各地で参政権運動が起こった。⁽³⁾ また、教育面においても、女子専用のコレッジとして、ケンブリッジにガートン・コレッジ (Girton College) とニューナム・コレッジ (Newham College) がそれぞれ1869年、71年に創設されるなど、著しい進歩があった点は看過できない (Eschbach, 66-74)。トロローブはミルのラディカルな主張に必ずしも賛同していたわけではないが、彼がミルを尊敬していたことは明らかであり⁽⁴⁾、また、女性の社会的地位の向上、或いは女性の活発な社会進出の兆しを感じさせる時代の動向に彼が無自覚でいたとは考えにくい。そしてある意味では、この目覚ましい変革の時代にルーシーのようなキャラクターが描かれたことは驚くに当たらない。すなわち、この小説では一見「脇役」であるルーシーに、「新しい女性」の進む方向が示されているように思われるのである。⁽⁵⁾ ルーシーもまた、語り手が言うように前夫やジョージのような男たちの「犠牲者」(241)であるが、エミリーとは異なり、女優としてのキャリアを確立した彼女は、ジョージのような夫に苦勞しながらもたくましく生きていくことが読者には想像されるのである。この点でルーシーの生き方はこの小説の約5年後に書かれた『当世風の暮らし』(The Way We Live Now, 1875年)において、フィーリックス・カーベリーやポール・モンタギューに捨てられたマリー・メルモットやハートル夫人が、資力を頼りに、新天地、アメリカに渡っていく姿に通じるものがあると考えられる。こうした当世を生き抜く女たちには、「楽園」の中で守られてきた「白い羊」には見られないしたたかな強さと生命力が漲っている。

注

- (1) ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』(Pride and Prejudice)のベネット家の場合とは異なり、ホッツパー一家の地所は限定相続(entail)と定められていない。
- (2) 1869年11月20日、リチャード・ベントリーに宛てた手紙の中で、トロローブはオースティンのことを「私の特に好きな小説家」と言っている。Letters I, 486.
- (3) 1867年から1868年の婦人参政権をめぐる動きに関しては、Catherine Hall, Keith McClelland, Jane RendallのDefining the Victorian Nationの第3章を参照。pp.139-151.
- (4) たとえば、トロローブはウェストミンスター選挙区から出馬したミルのために応援演説を行った。また、ミルのことを「私がこの人に会うためなら日曜に家を出てもよいと思う世界で唯一の人」とも言っている。John Hall, 278.
- (5) ルーシーはジョージと結婚した後も女優の仕事の続けると言っているが、これが実現すれば、彼女は「初の仕事を持ったレディー・ホッツパー」ということになる(Morse, 87)。

引用文献

- Eschbach, Elizabeth Seymour. *The Higher Education of Women in England and America. 1865-1920*. New York: Garland, 1993.
- Hall, Catherine, Keith McClelland, and Jane Rendall. *Defining the Victorian Nation: Class, Race, Gender and the British Reform Act of 1867*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.
- Hall, N. John. *Trollope: A Biography*. Oxford: Clarendon, 1991.
- Morse, Deborah Denenholz. *Reforming Trollope: Race, Gender, and Englishness in the Novels of Anthony Trollope*. Farnham: Ashgate, 2013.
- Pollard, Arthur. *Anthony Trollope*. London: Routledge & Kegan Paul, 1978.
- Trollope, Anthony. *An Autobiography*. Oxford: OUP, 1989.
- , *Doctor Thorne*. Oxford: OUP, 1991.
- , *The Letters of Anthony Trollope*. Ed. N John Hall. Vol . I. 1835-1870. Stanford, California: Stanford UP, 1983.
- , *Sir Harry Hotspur of Humblethwaite*. Oxford: OUP, 1991.
- Vlasopolos, Anca. "The Weight of Religion and History: Women Dying of Virtue in Trollope's Later Short Fiction." *The Politics of Gender in Anthony Trollope's Novels: New Readings for the Twenty-First Century*. Eds. Margaret Markwick, Deborah Denenholz Morse, and Regenia Gagnier. Farnham : Ashgate, 2009. 221-233.